小学校には、バーくらいある

尾崎（おざき）　昂臣（たかおみ）

まなび文庫

3001

●はじめに

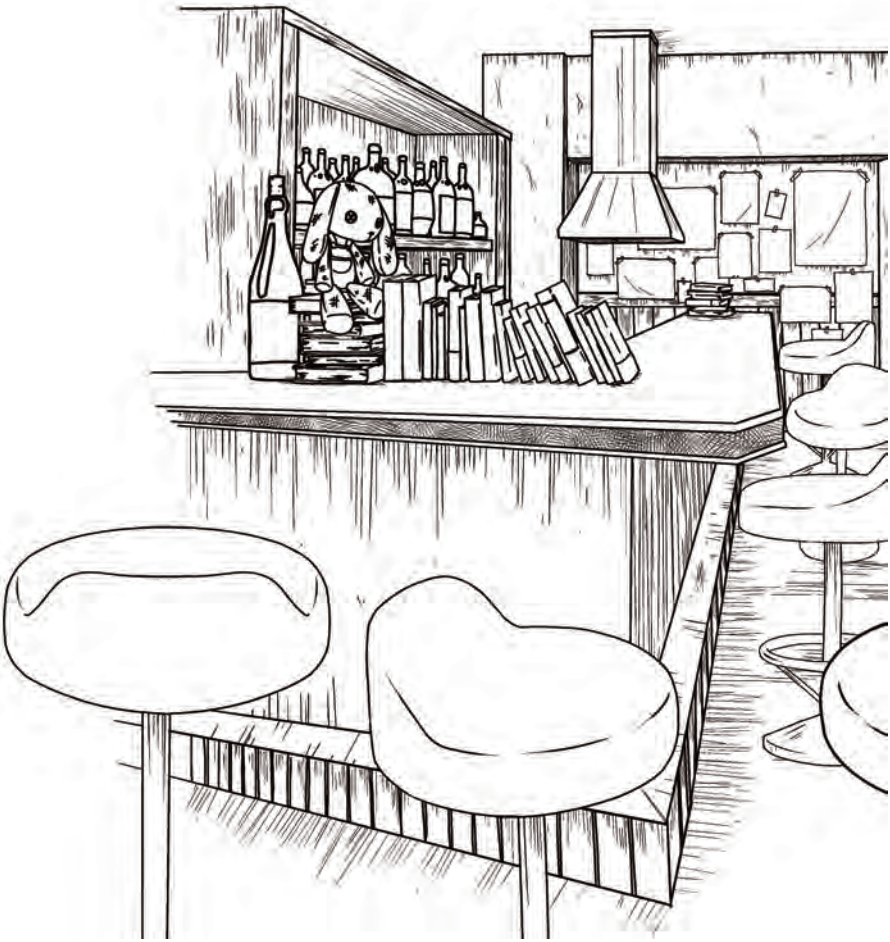
小学校にかよったことがあったり、
公園であそんだことのある人なら、
だれでもしってることがある。

このことは、ぜったいに、
永遠につづいていかなくちゃいけないんだ、
ということ。
どれだけ年をとったって、かわらずに。

そういうわけで、
「小学校には、バーくらいある。」
ほんとに、ある。

小学校には、バーくらいある／もくじ

1　小学校には、バーくらいある　8
2　質問いがいでしゃべれない？　42
3　二どめは、ずっと　67
4　そのうちにあなたも、なにかわかるかも　88
5　そうじはわるいことじゃない　108
6　おんなじ星を　見ているんだね　124
7　学校、きてんじゃんか　144
8　それがバランス　168
9　そういうことだったんだ　180
あとがき　190



1　小学校には、バーくらいある

いのこりのあと裏門にまわっていくとちゅう、南校舎のいちばんうえ、いちばん右はしの教室の窓から、キラキラひかる電気のかざりがたれていた。

しずくがこぼれるように、たったひとすじ。ほんの五十センチくらいの、色とりどりなちいさな豆電球のつらなり。

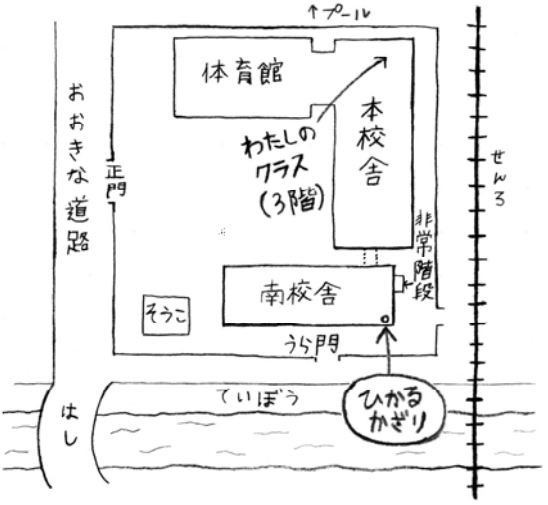
あそこって、なんの教室だったっけ？

南校舎は理科室や図工室など、特別なときの教室しかない。たしか三階は、多目的室がいくつかあるだけ。いちばんおくの教室には、いちどもはいったおぼえがない。

キラキラきらめく、ひかるかざり。いったいだれが、なんのために、窓からたらしているのだろう？　なかのことはカーテンでわからない。じっと見ていたら豆電球の色がひとつひとつ、はっきりとわかるようになってきた。赤、みどり、青、黄色……ささやかに、

星がまたたくように点滅している。すこし、空が暗くなったような気がした。
ふしぎな光景。六年間も学校にかよっていて、はじめて見る。
けど、ひきかえしてその教室を見にいく勇気はない。だれか先生がなかにいるなら、はやくかえれとおこられてしまう。どろぼうやおばけかもしれない。
くるっとまわり、裏門から校外にでる。目のまえは堤防で、その先は川。右にいけば帰り道、左にすすむといきどまり。ひかるかざりは、その正面。
そういえば、いちども左の道をいったことがない。川をわたる電車の鉄橋につきあたるだけだから。裏門からでたことも、じつはあんまりない。
――せっかくだし、もうちょっとちかづいて見てみるか。
みどり色のフェンスぞいを、いつもとはぎゃくむきに歩く。
ひかるかざりがだんだんちかづいてくる。
先生だったらなぜ、あんなものをたらすんだろう。どろぼうならどうして、わざとめだつようなことをするのか。おばけなら……そのおばけは、わるいおばけだろうか。きれいなかざりを窓からたらす、わるいおばけがいるものだろうか。

それとも、幽霊かな。幽霊だったら、なにか事情はありそうだ。
すこしこわくなったが、もうひかるかざりは目のまえだった。
なにげなく、もう二、三歩すすんでみる。
「あっ。」と思わず、息をのんだ。
おどろいたことは、三つあった。
いきどまりではなくて、左にまがる道があったのだ。
その道のとちゅうに、ちいさな門があるのが見えた。
そして南校舎のよこには、三階までつづく非常階段があった。
道は細くて、まばらに草のはえた土の地面だった。右足をだしてふみしめたら、ミシリ、とちいさな音がした。



一歩ずつ、門のほうへちかづいていく。そのたびにミシリ、ミシリと運動ぐつが音をたてた。門は鉄でできた格子の扉で、銀色のドアノブがついていた。

心臓がなみうつ。なにかわるいことをしているような気がする。ノブに手をかけると、胸の鼓動がはやくなった。ゆっくりと、右にまわす。そして、しんちょうにひく。

イイ……ときしむ音をたてて、扉はひらいた。どうしよう。

こんなことは、しらない。この細い道も、扉も、非常階段も、もちろんあのひかるかざりも、なにもしらなかった！

わたしは、すこしひらいた扉のむこうをじっと見つめたまま、氷のようにかたまってしまっていた。

手のひらがつめたい。

背中を列車がとおりぬける。うるさい音をたててとおざかり、静まる。

一瞬、世界中からすべての音が消えてしまったような気がした。

目だけをうごかして、みどりのフェンスごしに左右を見る。だれもいない。非常階段までは、ほんの数メートル。

おこられるだろうか？　どうやっておこられるだろう？　ここからはいって、すぐに扉をしめてしまえば、すくなくともこの扉からはいったことだけは、わからない。裏門からまっすぐかえらなかった、ということはおこられるかもしれないが、ここからはいった、ということはわからない。

でも、非常階段をのぼるのは？　そこから――もしかぎがあいていたら――校舎にはいってしまうのは？　あの教室を、のぞいてみるのは？

ほんのすこし、空が暗くなってきている。まさかおばけなんてのはいないけど、夜になったら、おばけかもしれなくなってしまう。そうなったら、わたしはぜったいに、あの階段をのぼることなんてできない。明るいうちに、決心しないと。

決心？

ちょっと、おかしくなった。たぶんわたしはもう、この扉をあけるつもりなんだ。

そう思ったら、わすれていた胸の鼓動がかえってきた。

きっとこの扉を、わたしはあける。

ゆっくり、ゆっくりと、腕をひいていく。

からだがはいるくらいだけひらいたら、よこむきにすっとはいって、すみやかにしめる。しのび足で非常階段のしたまで走る。

階段はらせんになっていて、ぐるぐるまわりながらあがっていく。息をころし、手すりのかべにかくれるよう腰をかがめて、音をたてないよう一段ずつのぼる。

三階のドアは、レバーをしたにおろしてから手まえにひっぱるタイプだった。ふりかえると線路が見える。もしそこに人が立っていたら、目があったかもしれない。

かぎは、あいていた。くつをぬぎ、またよこむきになって、すきまからなかにはいる。

ろうかの電気はついていない。非常口のみどりのあかりが、あの教室の入り口をぼやっとてらす。それは、扉だった。

扉！　学校のなかに、こんな扉があるだろうか。ほかの教室はみんな、くぼみに指をいれてよこにガラガラとスライドさせるやつなのだ。目のまえにあるのは、とってもおもたそうなこげ茶色の古めかしい扉で、たてに長いおおきな取っ手がついている。窓はなくて、なかのようすはまったく見えない。

おそるおそる歩みよって、扉のまえに立つ。もの音がきこえる。そっと耳をつけてみる。

人の話し声だ。なにを話してるんだろう。
これをあけたら、さすがにいけない気がする。
扉からゆっくりと耳をはなし、静かにひきかえして、非常口のレバーに手をかけた。
……でも。
よくかんがえてみると、ここは小学校のなかで、子どもがいるのはあたりまえだ。たしかに時間はおそいけど、さっきまでだって学校のなかにいたのだ。なにより、この扉をあけてはいけません、と禁止されたおぼえもない。だから、もしまずかったとしても、「ごめんなさい！」とあやまるだけで、すむんじゃないだろうか。まさか小学校のなかで、ほんとうにわるい人たちが会議しているとも思えない。
線路のむこうの空が、非常口の窓から見える。
こうしているあいだにも、そとはだんだん暗くなっていく。
もういちど、扉に歩みよる。のぼり棒のようにふとい、おおきな取っ手をにぎる。まわすドアノブも、さげるレバーもない。ぎゅっと、手まえにひっぱる。
グィ……と低い音。じわじわとなかの光がもれだして、ろうかに三角の図をえがく。

ちょっとうす暗いあかりのしたで、数人のおとながお話しをしている。一人はおじいさんで、おくのほうに立っている。ほかの人はそのおじいさんのほうをむいて、ならんでいすにすわっていた。わあ……と息をもらすひまもなく、おじいさんと目があった！

「どうぞ。」

まっすぐに、わたしの目を見ておじいさんはいった。

すわっている人たちがいっせいにこちらを見る。

すぐに扉をしめて、いそいでかえってしまったほうがいいのか。それともこのまま扉をあけて、なかにはいったほうがいいのか……。

「どうぞ。」

と、こんどはいすにすわっている人たちが声をそろえていった。いちばんおくにいる人の声はきこえなかったけど、口がぼそっとうごくのが見えた。

いちおうわたしは、歓迎されているみたいだ。

扉をあけて、なかにはいる。

「こんにちは。」

とわたしはいった。
「こんにちは。」
と、おとなたちもいった。一人だけ、「こんばんは。」といった気がした。
こうなると、あとはどうしていいのか、わからない。
「ここは……？」
ちいさな声で、やっとそれだけいえた。
「バーですよ。」
おじいさんがこたえた。
バーって、お酒を飲むところ？　小学生がはいっちゃ、いけなかったんだ！
用意していた「ごめんなさい！」をさけぼうとした瞬間、おじいさんが手のひらをこちらにむけて、あいているいすをさした。ほかのおとなたちは、それを見てうなずいている。すわれということらしい。それじゃあ、そうするしかない。
ふだん学校ですわっているいすの、二倍くらいの高さがある。となりの席の人が「ステップがあるよ。」とおしえてくれた。指のさきを見ると、いすのしたのほうについてい

る足場のことだった。
腰かけると、おじいさんから「はい。」とおしぼりをわたされた。あったかい。わざとゆっくり手をふきながら、お店のなかを観察する。
ふつうの教室を半分にわったくらいの長方形のへや。それをさらに二つにさくように、おくのほうから細長いつくえ（カウンターというのだろう）がのびていて、あるところで左おくのほうへまがっている。レの字を左右ぎゃくにしたかたちだ。手まえがわのいすにはわたしをいれて四人がすわっていて、むこうがわ、つまりカウンターの内がわに、おじいさんが立っている。おしゃれな帽子をかぶり、えりのあるシャツのうえからそでのないえんじ色のジャケットを着ていた。マスター、とよべばいいのかな。
わたしがすわったのは〈逆レの字〉のちょうどまがりかどあたりで、わたしより右がわに二人、左がわに一人がすわっている。
「きょうははやい時間から、お客さんがおおいね。」
左の人がいった。
「たまには、こういう日もある。みんながなぜか、きょうはあの店にいこう、はやい時間

にいこうって、いっせいにおなじことを思うような日がね。」
マスターがいった。そして「こない日は、ほんとうにだれもこないんだから。」とつけくわえた。
あらためて、へやのなかをながめてみる。マスターのうしろにはおおきな棚があって、お酒のびんがたくさんならぶ。わたしから見て左手のおくには本棚と、入り口とはべつのドアがあった。はいりきらない本やいろんな小もの、ぬいぐるみなどがへやのそこかしこにちりばめられている。入り口のちかくにはくつ箱。右おく、つまり入り口から見て正面のかべには、チラシやポスターがたくさん貼られている。窓はそのおくにあるはずだ。たぶん、もうひとつのドアをとおってむこうがわへいけるのだろう。
全体に、整理されてはいないけど、きたない感じもない。ふしぎとおちつく。木でできた濃い茶色のカウンターと、黄色いあかりのせいかもしれない。
「なにかお飲みになりますか？」
マスターがあらたまって、問いかけてきた。
――なにって、わたし、なにか飲むの？

学校のきまりで、お金はもってきちゃいけないことになっている。
「とりあえず、ランドセルをおろしては。」
あごに手をあてながら、右どなりの人がいう。時間をかせぐように、わたしはゆっくりとランドセルをおろし、あいている左どなりの席においた。さあ、どうしよう。
すみません、かえります。お金がないので。それだけいえばいいだけなのに、どうにも口がうごかない。もういすにすわって、かばんまでおいてしまったのだ。
いったいどんなものが、いくらくらいするのだろう。へやを見まわしてみても、メニューや料金表のようなものは見あたらない。「マスター、いつもの。」とか「つよいやつを。」みたいな、ひょっとしてそういうの？
「あまいかにがいか、どっちがいいですか。」
マスターのきゅうな質問に、あわててこたえる。
「あ、あまいの？」
「つめたいか、あったかいか。」
「……つめたい。」

かんねんした。いざとなったら、とりにかえろう。
「しゅわしゅわしているか、まったりしているか。」
「まったり。」
「とってもあまいか、そうでもないか。」
「そうでもない。」
「ふむ。」
マスターはちょっとかんがえて、「ミルクセーキなんてのは、どうでしょう。」といった。
「おねがいします。」とこたえた。
マスターは足のついたおおきなまるっこいグラスをわたしのまえにおくと、冷蔵庫からたまごと牛乳をとりだして準備をはじめた。
「ここのミルクセーキは絶品ですよ。わたしもね、もうお酒は飲めない、ってときはさいごにたのむんだ。すっきりして、ほんのりあまくて……」
「材料がいいのさ。」
そういうとマスターはシルバーのいれものをカウンターのうえにのせ、そこに氷と、た

まごの黄身と、牛乳と、シロップのような透明な液体をいれて、ふたをした。それを両手でもちあげて顔のまえにピタリととめると、ひと呼吸おいてカコカコと振りはじめた。

腕のうごきがだんだんゆっくりになって、やがてとまる。ふたをはずして、グラスにミルクセーキを氷ごとそそぎこむ。さいごにストローをさして、「はいどうぞ。」とわたしのほうへスッと押しだした。

一口飲んで、

「おいしい！」

と声をあげた。おおきな声になってしまったからか、みんながわらった。

ほんとうに、すっきりして、ほんのりあまくて、まったりとしていて、心のなかにしあわせな気持ちがそそぎこまれていくような、うれしさ。こんなにおいしいものを飲んだのは、いつぶりだろう！

感激していると、目のまえに食べもののお皿がさしだされた。あまいチーズでくるまれたナッツと、バジルとツナののったクラッカー。どちらもおいしい。

「こんなところに、こんなところがあるなんて。」

気がゆるんで、へんないいかたになってしまった。
「しる人ぞしる、かくれたバーだからね。」
「わたしもはじめてのときは、きんちょうしたもんですよ。」
左右の人がうれしそうに話す。
「まさか小学校に、バーがあるなんて思いませんでした。」
わたしがいうと、マスターは大まじめな顔で、
「小学校には、バーくらいある。」
といった。
小学校には、バーくらいある。そうなのかな。
「どの小学校にも、バーがあるんですか？」
「わからないけど……」
マスターはすこし、かんがえたような顔をして、
「小学校には、バーくらいある。」
ともういちどいった。

いろいろ、きいてみたくなった。
「あの扉は、特別につくったんですか？」
「そうですよ。」
「どうして、ああいう扉にしたんですか？　ガラガラのじゃなくて。」
　またマスターは、しばらくかんがえてから、
「ひき戸のバーってのは、見たことがないからねえ。」
といった。ひき戸というのは、ガラガラのことだろう。
「ふと思ったのですが、ドアや扉は前後にひらくイメージだけど、戸といったときには、左右にうごくもののような気がしますね。」
「左右のばあいは、ひらくというより、あくとか、あけるとかいう感じ。」
　お客たちが話しはじめる。
「そう思うと、〈扉〉という字の〈非〉の部分は、二つの扉が前後にひらくイメージをあらわしているのかもしれません。観音びらきのような。」
「〈戸〉だとどうも、まえにせまってくる感じとか、おくゆきがない。」

たしかに、〈戸〉という字はどちらかといえば、左右にうごきそうだ。〈扉〉のばあいは、〈戸〉の部分だけはそのままで、〈非〉だけが前後にひらいたり、とじたりする。いや、でも〈非〉だって、コンビニの自動ドアみたいに、右と左がそれぞれうごいたりするんじゃないか。――だめだ。左のがうごくと〈戸〉の〈ノ〉のところにぶつかってしまう。あ、そうだ自動ドアって、〈ドア〉だけど左右にうごくなあ。

いろいろかんがえているあいだも、二人のお客は話しつづけている。だけど、〈ドア〉は左右にもうごく、という話は、まだでていない。

「しらべてみましょう、えー……〈戸〉のばあいは、どちらもさすらしい。そういえば〈ひらき戸〉ということばをきいたことがあります。ひらくものも〈戸〉というんですね。ただ、日常生活のなかでは〈戸〉というとまず〈ひき戸〉をあらわす、とも書いてあります。〈扉〉のばあいは、やはり前後にひらくもののようです。」

右の人が、スマホをながめながらねっしんに解説する。

〈ドア〉も両方じゃないですか？　と、いうならいまだな、と思ったけど、いわないほうがいいのだろうか。いったほうがいいのだろうか。

「〈ドア〉も両方なんじゃない？」
マスターがいった。話していた二人は、一瞬きょとんとしたあとで、
「そうか、電車の〈ドア〉はよこにうごきますね。」
「なるほど、さすが！」
と口ぐちにいった。さすが、ということは、たぶんいったほうがよかったんだ。
「じゃ、〈扉〉だけ仲間はずれ、ってことになりますね。」
「だから、扉ってのはいいんだ。おくゆきがあってね。」
「この店も、ひき戸や自動ドアだったら、ずいぶんイメージがちがいます。」
扉の話題だけで、ずいぶんもりあがる人たちだ。
「よくぞ、扉をあけてくださいました。」
マスターがみんなにむかって、わざとていねいにしたような調子でいった。
「ああそうだ、あなたはどうして、あの扉にたどりついたんです？」
右の人がわたしにたずねる。正直にこたえよう。
「いのこりのかえり道で、窓にひかるかざりが見えたから、気になって。」

「だれかにきいたのではなくて？」
「はい。」
「たいした勇気！　すばらしいです。」
「めずらしく、すてきなお客さんだ。」
左の人のじょうだんっぽいことばに、マスターはまゆをちょっとうごかして、
「すてきじゃないお客さんってのは、あんたのことかな？」
「よしてくださいよ、もう！」
あーはっは、とマスターはわらった。このおじいさん、いったいいくつなんだろう。
「ところで、いのこりって？」
左の人がたずねる。やはり、正直にこたえた。
「自己紹介のシートを、書いていたんです。」
「そんなの、ちょちょいと書いて、ポイとだせばいいじゃないの。」
「なんだか、書けなくて。」
「ぜんぜん？」

「はい。二時間いじょうずっとすわって、ひと文字も書けなくて……」
はははは、と左の人がわらった。
「そりゃあ、ばかばかしい時間だったね。ミルクセーキはごほうびだろうね。新年度からごくろうさんだ。先生はなんて？」
「とくには、なにも。六時くらいまでまってくれてて、正門はもうしまったから裏門からかえりなさいって。」
「担任はだれですか？」
マスターがたずねる。
「成田先生です。」
「リカ氏か。」マスターの顔がほころんだ。「いい先生ですよ。」
そうなのかな。でも、このマスターがいうのだから、いい先生なのかもしれない。
「じゃあここにきたのは、予定してなかったわけですね。」
マスターはかべの時計を見あげた。ふつうの教室とおなじ位置にある。七時すぎ。金曜日だしお母さんはまだかえってきていないはずだ。

しばらく無言になったあと、右の人が話をもどした。
「れいの自己紹介のシートは、きょうまでに書くはずのものだったんですよね。」
「六時間めに書く時間があって、ほかの子たちはみんなだしてかえりました。」
「自己紹介はにがて？」
「去年までは、書けてたんですけど……」
「がぜんおもしろい。どうして今年は、書けなくなったの？」
左の人が身をのりだした。右の人がたしなめる。
「ちょっと、あんまりおもしろがるもんじゃないよ。あの、話したくないことは、話さなくていいんですからね。」
なぜなにも書けなくなったのか。それは、わたしだってしりたい。
「わかりません。」
ちょっとの沈黙。
「今年度は、なにか特別なことがあったんですかね。」
マスターがぼそりといった。

特別なこと。ないことはない。

「自己紹介とはあんまり関係ないんですけど……」

ここでいったん、ことばがつまった。みんなもうごきをとめる。わたしのことを見ている人もいれば、見ていない人もいる。でもたしかにわかるのは、みんながわたしの、つぎのことばを待っていた。「話したまえ。」と、声にださないでいっているみたいだった。ちょっとこわい気もしたけど、でも、話したい気持ちもあった。

わたしは、ぽつぽつと話しはじめた。

始業式があって、そのつぎの日に入学式があって、その二日あと――きのうなんですけど――委員会ぎめがあって、そのとき。まず計画委員をきめて、計画委員が司会になりました。で、ほかの委員がきまって、すこし時間があまって、女子の計画委員になった白鳥さんが〈全員あそび〉のことをいったんです。

〈全員あそび〉は、きまった曜日の放課後に、クラスみんなであそぶこと。五年生のとき、担任の篠山先生が二組のきまりにしてたんです。この日は公園でドッヂをやろうとか、け

いどろをやろうというのを計画委員が中心になってきめて、うしろの黒板に書いておくしくみでした。全員っていっても予定がある子やぐあいのわるい子はきません。それでもだいたい、いつも二十人くらい。わたしも二組だったんですけどほとんどいってて、たのしかった。それを白鳥さんが、今年も二組でやろうって。

二組っていっても、篠山先生はきのう離任式でもう学校にいないし、クラスがえもあったから半分は一組だった子なんです。〈全員あそび〉はほかのクラスの子がはいっちゃだめなきまりだから、あそびたい子とあそべない、って反対する子もおおくて。

白鳥さんは、クラスのしんぼくを深めるために〈全員あそび〉は必要だっていいます。男子の計画委員になった近藤くんも、一組だったんですけど白鳥さんとおなじ意見でした。計画委員がいうんだから、週に一日くらいならやってみよう、ということになりそうだったんですけど、佐藤くんが手をあげました。

佐藤くんはしたにきょうだいが二人いて、親が家にいないから放課後はその世話をしなくちゃいけなくて、去年の〈全員あそび〉には参加したことがなかったんです。〈全員あそび〉のつぎの日はみんながその話でもりあがってて、いけなかった子は「つぎはぜった

い！」っていうんだけど、佐藤くんはつぎもきっと参加できないのがわかってたから、さみしかったって。そう話したんです。

そしたら白鳥さんが、「したの子たちをだれかの家にあずけたら。」って提案して、それはいい、ってなりました。でも「だれんちに？」ってだれかがいったら、シーンとしちゃった。それで、白鳥さんが泣きだしちゃったんです。しんぼくもなにもないじゃない、どうしてそんなにつめたいの？　って。おなじクラスになったんじゃないの、って。

「じゃあ、おまえんちであずかれよ。」って男子のだれかがいったら、白鳥さんはもっと大声になって、「あたしんちも、事情があるの！」って……。

わたし白鳥さんは好きだし、とってもいい子なんだけど、こういうところあるなって。こういうところってなんだろう。うまくいえない。なんだか、このときくらいから、わたしはおかしかったのかもしれないです。

白鳥さんはそのあとずっと泣いちゃってて、佐藤くんは「わかったよ。ぜんぜん参加できなくてももんくいわない。妹も小学校にあがったから、そのうちほっとけるようになるし。」っていいました。やさしいんです。それでとりあえず、〈全員あそび〉は木曜日の放

課後にしようってなって、その日の午後にあつまったんです。あそびは缶けりでした。
ほとんど全員、きたと思います。佐藤くんも、したの子たちとよこで見てました。
わたしは一回、缶をけれたからたのしかったけど、みんなはどうだったんだろう。缶けりは二十人でやるのにはむかない。おにの人数とかルールをかえたらもっとおもしろくなるかもしれないけど、人がおおいと相談も大変で。だからやっぱり〈全員あそび〉でたのしいのはドッヂボールとかなんですけど、じょうずな子とそうでない子がはっきりでちゃう。なんか、むずかしいなって。
そういうことが、きのうあったってだけです。

「ふうん、これはむずかしい話ですね。」
右の人が、あごに手をあてながらいった。「関係があるような、あんまりないような。」
「自己紹介シートってのは、誕生日がいつで、血液型がどうで、しゅみやとくぎがなんだっていう、わたしはこういう人なんです、っていう、そういうのでしょ。」
左の人はそういって、ぐいっ、とお酒を飲みほした。「おかわり！」

「誕生日くらい、書けそうなものですが。」
右の人はまだあごに手をあてている。
「とくにきまった項目はなくて、まっ白のシートなんです。去年のは誕生日とかとくぎとか、書くことがいくつかきまってたんですけど。」
「ほかの人はどういうことを書くんでしょう？」
「誕生日とかとくぎとか、書いてたみたいです。」
「じゃあ、自分もそうすりゃいいのさ。」
「なんで誕生日を書くんだろう？　って思っちゃって……」
「とくぎは？」
「とくぎってなんだろう？　って。わたし、なにかとくいなこと、あるのかな。」
「〈自己紹介の書けないこと〉なんてのはどうだい。」
「とんちじゃないんだよ。」
また、右の人が左の人をたしなめる。漫才みたいだ。
「まじめなんですね。」

お酒をつくりながら、マスターがつぶやく。
「まじめ？」
「そう、とてもまじめ。そこまでいったら、もっとまじめになったって、いい。」
マスターは、きわめてまじめな顔をしている。
「また、テキトーなこといって、この人は。」
ちゃちゃをいれるのは、もちろん左の人。
「もっとまじめ。ううむ、これは、いや、深みがありますよ。」
これはもちろん、右の人。
「どうしたら、もっとまじめになりますか？」
マスターは、しばらくかんがえた。十五秒くらい、たっただろうか。
「わからん。」
ずっこける。この人は、まじめなんだか、ふまじめなんだか。
「わからんけれども、これだけはいえます。わからないってことは、そのうちわかるかもしれない、ってこと。」

「わかります！」
といって、左の人はわらった。「おかわり、まだですか？」
うーん、よくわからない。ほんとにそのうち、わかるのかなあ。
時計を見る。八時ちかくなっている。そろそろかえったほうがよさそうだ。
「それじゃ……」
といって立ちあがったのは、右がわのいちばんおくにすわっていた人だった。わたしが扉をあけたとき、ぼそっと「どうぞ」の口をした人だ。扉からでていくとき、マスターと二人のお客は、「おやすみなさい。」といった。わたしもすこしおくれて、「おやすみなさい。」といってみた。
って、あれ？　いまの人、お金をはらってないような。
マスターと二人のお客は、なにごともなかったようにお話しをつづけている。
お金、いらないのかな。わたしはランドセルを手にとってひざにのせ、「あの、わたし、もうそろそろかえらないと。」といった。
「ああ、ありがとうございます。」

「お金は……」
「あ、いただきません。」
そんな夢のようなお話が、あってもいいの？
「だいじょうぶなんですか？」
「なにが？」
「その、経営とか。」
「や、むずかしいことばをつかいますね。」
あごに手をあてて、右の人がいった。感心したり、かんがえごとをするときに、あごに手をあてるんじゃないかな、と思った。
「経営は……まあいちおう商売というか、生きていかなきゃならないから、たまにあぶないときはあります。でも、みなさんに助けてもらっていますから。」
マスターはちらっと、右の人の顔を見た。
「はい、たとえばね、わたしなんかは、たまにお酒を寄付しています。仕事がたまたま、お酒に関係することなので。めずらしいのが手にはいったり、あまったりすると。」

「自分はね、棚や電化製品をなおしたり、かべをなおしたり。」
「べつにお金がほしくないってわけじゃないから、くれるって人がいりゃ、もらうしね。いまのとこ、それでなんとかなってます。」
「じゃあみんな、ここのお客さんは、なにかしらでこのお店のやくにたってる、ってことなんですね。」
「まあ、やくにたつ、ということばが、なにを意味するか、にもよりますが。」あごをなでながら、右の人。「それぞれが、それぞれに、それぞれのしたいことをしているだけ、でしょうね。わたしがお酒をもってくるのは、めずらしいお酒をみんなに飲んでもらいたいからだったり、家にあってもじゃまなものを処分するためです。やくにたちたい、という気持ちではないです。やくにたつなら、それにこしたことはないですが。」
「自分も、好きだからなおしてるだけさ。」
そうはいうけど、二人はじゅうぶん、やくにたっている。
「さっきかえった人は、なにをしてるんですか？」
「あの人は、ただいるだけ。」

「ただいるだけ？　それでいいんですか。」
「ただいるだけで、わるいことなんてありません。」
「なんのやくにもたたないで？」
　マスターが顔をしかめる。
「やくにたつ、たたないでものごとをかんがえすぎるのは、あんまり感心しないです。それに、ただいるだけが、なんのやくにもたたないときめつけるのは、おかしい。ただいるだけで、じゅうぶんかれは、やくにたっています。」
「どう、やくにたつんですか？」
　マスターの口がとまった。わるいことをきいたのだろうか。しかし、ただかんがえていただけらしい。なん秒かたって、こたえた。
「わからん。」
　ずっこけ。やっぱり、この人はよくわからない。
「わからんけれども、これだけはいえます。」またマスターが、まじめな顔になった。「ただいるだけってことは、とくにいいこともしていなかったとしても、わるいことだってし

ていない、ってことですよね。まわりの人、その場にいる人をいやな気持ちにさせたり、わるい影響をあたえていない。わるいことをする人は、〈ただいるだけ〉とはいえません。だから、ただいるだけの人は、わるくない人。」

「もし、わるい人がきたら、どうするんですか？」

「そういう人は、なんどかきても、そのうちにこなくなります。」

「そういうものなんですか？」

「そういうものですね。」

「お金がいらないんなら、へんな人がたくさんきそう。」

「ただより高いものはない、っていうことなんでしょう。そういう人は、あんまり居心地がよくないみたいです。」

とにかく、お金はださなくていいらしい。

時計を見た。そうだ、かえるんだった。かえるときって、なんていったらいいんだろう。すこしかんがえて、いった。

「それでは、きょうのところは、これで。」

こんなところで、たぶんいいだろう。のこったミルクセーキをじゅっとすって、席をたった。というか、とびおりた。

「お気をつけて。」

マスターがいう。

ちょっと、なごりおしい。

「その帽子、なんていう種類のやつですか？」

気になっていたことをたずねてみた。

ちょっとかんがえて、つばをなでて、マスターはこたえた。

「名まえはしりません。映画とかでよく見るやつ。『素晴らしき日曜日』とか。」

素晴らしき日曜日。おぼえておこう。

「おやすみなさい。」といいあって、お店をでた。「おかわり！」と声がきこえた。

そとはすっかり暗くなっていた。ひかるかざりは思ったよりめだたず、ひかえめにまたたいている。

マスターは、いったいいくつなんだろう。これまでどんな生活をしてきたのだろう。い

つからお店をやっているんだろう。お客さんたちは、どういう人たちなんだろう。みんな男の人だったけど、女の人もくるのだろうか。なにがきっかけであのお店にかようようになるんだろう。どんな名まえで、なん歳くらいで、お仕事は……。気になることはたくさんあった。もっといろいろ、質問しておけばよかったな。

——ここまでかんがえて、ふと気づいた。

そういえば、だれからも名まえや学年をきかれなかった。

だからわたしも、なにもきかなかったのかもしれない。

著者　尾崎昂臣（おざき　たかおみ）
1984年、名古屋市に生まれる。早稲田大学教育学部国語国文学科卒業後、中学・高校の教員や、文章などを生業に。2005年頃からバーに立ち、2017年「夜学バー」営業開始。15歳でひらいたホームページは、いまも更新中。
http://ozakit.o.oo7.jp

まなび文庫　3001　　小学上級から

小学校には、バーくらいある

NDC 913 191p 19cm　　2019年5月　初版第1刷

著者　尾崎　昂臣
画家　山猫スズメ

発行所　夜学バー
東京都台東区上野2-4-3　池之端すきやビル301
〒110-0005
☎03-5826-4750　✉brat.yagaku@gmail.com
http://ozjacky.o.oo7.jp/brat/

©Takaomi OZAKI, 2019　　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はあたりです

夜はやがてすぎ、こわくなくなる。夜はまたきて、ともだちになる。
花はとじたり、ひらいたり。まちどおしい夜。まなび文庫です。

まなび文庫発刊に際して

尾崎　昂臣

人の心のまんなかに、ちいさなころの記憶や感覚がふかく根づいていることはうたがいない。そして一生のくらしというものは、「ただそのときのつづき」であるということも。

子どもとおとなのあいだに線はない。ただ、その人の持つ色彩と模様がすこしずつ変化していくだけ。うつくしい色彩や模様をはぐくむのは、たとえば、どこかへいってなにかを見たり、きいたり、感じたり、考えたり、ほかのだれかとおなじ時間をすごしたり、本を読んだりといったことによる。そういうよいことをくりかえして、人はすてきになっていく。

それらはもちろん、おさないときにかぎらない。どのくらい長く生きようと、うつくしくあろう、すてきであろうとするならば、いつもいつでもいつまでも、そのようにしているほうがいい。もしもあなたが、そういったことを心がけるまでもなく、つねにすでに永遠にうつくしく、永遠にすてきであるといった場合をのぞいて。

まなび文庫は、小学生くらいの年の人がたのしく読めて、それよりどれだけ年をかさねても、おなじように、いや、あるいはそれ以上にたのしく読めるようなものをめざして発刊した。思いえがく読者は「小学生以上」であり、上限はもうけていない。

作品そのものをたのしんでもらうことのほか、もう一つのたくらみは、「子どもの読める本をおとなが読むこと」であり、「おとなの読む本を子どもも読むこと」である。けっして「おとなでもたのしめる」とか「おとなこそ読むべき」ではない。みんながなかよく、たのしんでおなじ本を読むことが大切なのだと、われわれは信じる。それによって、子どもとおとなのあいだにあると思われていた線が、いつか、いつのまにか消えさっていくことを祈って。

令和元年五月五日